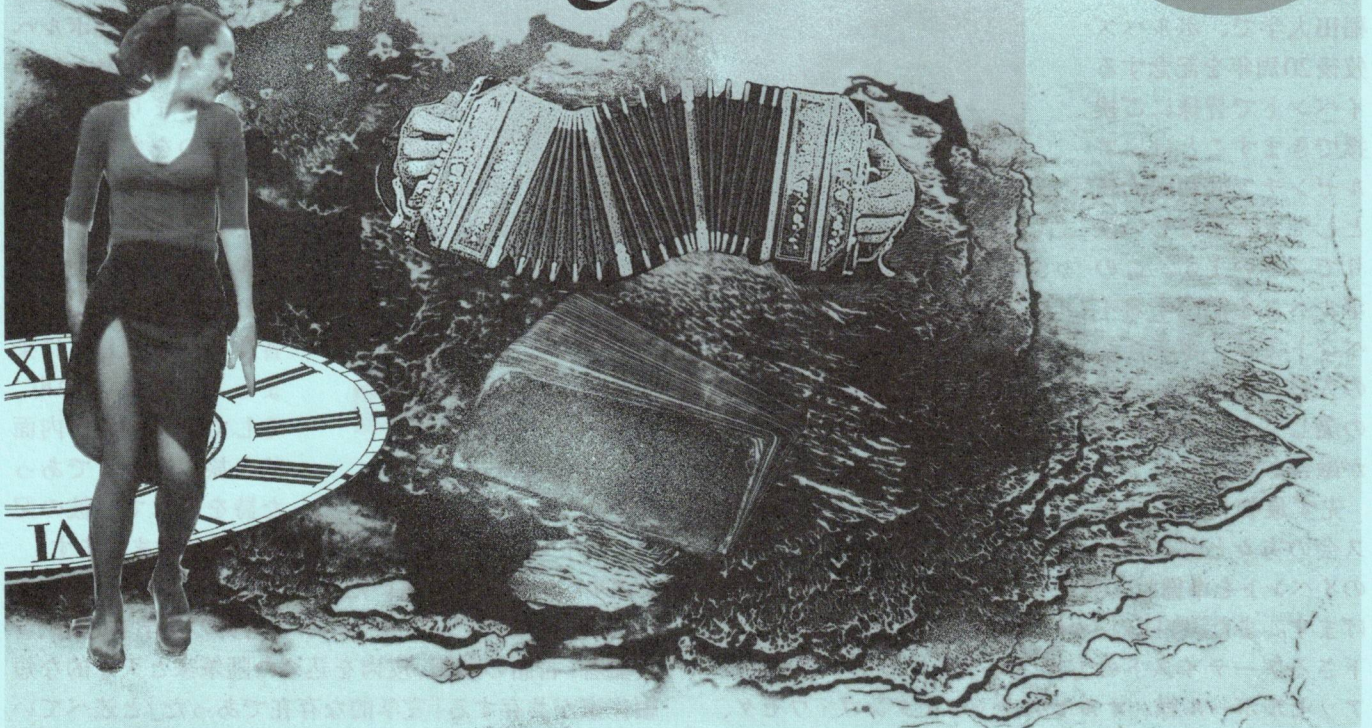


Argentina

No. 49



© 星野 美智子

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2006年 12月

ボルヘス歿後 20 周年記念	タンゴ名曲ものがたり (1)	8
アルゼンチン文化の夕べ	Resumen en castellano	9
「埼玉アルゼンチンの夕べ」を開催	「アルゼンチン日本人移民史」4 部作完成	10
決定は遅いが実行は着実ですね	第 9 回 「タンゴ音楽の集い」に参加して	11
アルゼンチン事情		

迷宮礼讃 ～ボルヘス歿後 20 周年記念アルゼンチン文化の夕べ～

中野 恵正

前世紀末に誕生し、20 世紀を、世俗的時間を超越した人生で送ったボルヘスの、「歿後20周年記念アルゼンチン文化の夕べ」を、彼の生誕100周年を記念し設立されたボルヘス会が、その7年後の本年11月16日に、早稲田大学小野梓記念講堂で、ボルヘス会主催、アルゼンチン大使館後援で開催された。

ポルスキ駐日アルゼンチン大使の昨年来の熱心な御勧誘に、感動されたボルヘス会会長野谷文昭早稲田大学教授を始め、大使館文化部と早稲田大学文化事業センターは緊密な連携で関係方面に声をかけたところ、多くの

ミュージシャン、アーティストの積極的参加を呼び、かくも盛大な文化的催しとなり、アルゼンチン民謡とタンゴの音楽と踊りで、会場満員の聴衆を魅了した。

また、この記念期間中、ボルヘス文学とテーマを共有される当協会評議員の星野美智子氏の素晴らしい版画展も開催され、記念行事に参加された。

開催当日は、注目のシンポジウム開催に先駆けたポルスキ大使のご挨拶、「迷宮礼讃」が講演された。その挨拶を下記にご照会し、記念行事の雰囲気をお伝えする次第です。

(なかの よしまさ；当協会常務理事)

ポルスキ駐日アルゼンチン大使のご挨拶

本日、この場所を提供して下さいました早稲田大学で、ボルヘス歿後20周年を記念するイベントで皆様にご挨拶できますことは、アルゼンチン共和国大使として大変喜ばしい限りでございます。このボルヘスを記念するイベントでは、ボルヘスの人格と同様に、芸術の美しさと学術の知恵が融合されます。



ご挨拶されるポルスキ大使

先ず最初に、ボルヘス会の方々と共に今回のイベントを準備して下さいました野谷先生にお礼を申し上げます。また、今回のイベント開催にあたり、協力して下さいましたアーティストの方々（ギタリストのアリエル・アッセルボール様、オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ、歌手の山崎美枝子様、女優の長浜奈津子様、バンドネオン演奏者の田辺義博様、ルナ・デ・タンゴダンサーのラウラとホセ、セバスチャンとチジコ、歌手のマキシモ・ファイナ様）、それからシンポジウムのパネリストの皆様、お手伝いのボランティアの方々に心から感謝を申し上げます。

今日、この場所で、1899年8月24日にブエノスアイレスで生まれたホルヘ・フランシスコ・イシドロ・ルイス・ボルヘスの姿を思い出します。

周知の通り、ボルヘスは遺伝的な病気で失明し、無情（むじょう）にも最後には自分で読み書きできなくなりました。しかしながら、彼にもたらされた失明という病気を通して、かえって人の心の奥底や想像の深淵を探ることが出来るようになったのです。

ボルヘスは、時間の本質、永遠、無限、運命、現実、アイデンティティ、鏡と迷路に対して一種の強迫観念に取り付かれていました。「私が書いたすべてのものは、いずれにしても、二つの困惑と関係しています。それは、おそらく同一のものであったかもしれませんが、時間と個人のアイデンティティ、つまり自我の現実ということなのです。」と述べています。その様なわけで、ボルヘスが、はかなくも1986年6月14日の水曜日、ジュネーブで86歳で亡くなったことを、今日、思い起こすことが嬉しいのかどうか-----は、疑問に思われます。

彼にとっては、おそらく、その日、その場所、生命の循環（じゅんかん）は、とるに足らないものと考えていたのでしょう。

其れにも拘らず、私達は、想像力によって失明を乗り越えたボルヘスの人生の迷路と彼の作品、つまり彼に残されたものをもって、常にボルヘスを思い起こします。今日は、特に、ボルヘスが愛したとされるタンゴの懐かしい音色とたくましさに染まったボルヘスの町、そしてボルヘスの内面的な旅の同伴者であった詩を通して、彼の記憶を呼び覚まします。

ボルヘスの伝記を書いた作家アレハンドロ・バッカロは、ボルヘスはアバンギャルドと古典の文学者、翻訳者と記者、言語の教師、皮肉を込めた随筆家と天才的な短編作家が共存する「文学的な存在であった」と述べています。ですから有名な「アレフ」（不死の人）を生み出したボルヘスはラテンアメリカ文学の栄冠を受け、20世紀の代表的な文学者の中で最も傑出した位置を占めています。

しかし、ボルヘスの偉大さは彼の作品ではなく、むしろ彼の読書に由来するものなのです。読書を愛したボルヘス自身「人は本を書くことによって偉大な文学者になるのではなく、本を読むことによってそうなるのである」と断言しています。ボルヘスが残した書齋は彼の知的活動を証明する場所なのです。

ボルヘスは典型的なアルゼンチン人の特徴を持っていました。つまり、彼自身が多文化な人間であるということを示していました。それは、家系にも表れ、父方はスペイン、ポルトガル、アイルランドの出身で、母方はスペイン、ポルトガルの出身でした。

ボルヘスの人生は、言うならば、国境を越えての国際人としての生活の連続でした。そして、このような国際人であることで、彼の作品から最も未知なる文化の真相が暴かれるのです。

もし人が習得できる言語の数によって、習得した言語と同じ数だけの文化を持っていると考えるのであれば、ボルヘスの習得したことばは、彼の人としての文化的な豊かさを表しています。そして、彼は人生の晩年において、先祖伝来の日本文化との特別な関わりを持ったに違いありません。

港町ブエノスアイレスの著名な一市民（いちしみん）であったボルヘスは出身地ブエノスアイレスを愛していま

した。町の歴史、雰囲気、隠れた片隅、典型的な人物、勇
壮な音楽は、ボルヘスの愛情の根底に潜在していました。

今まで、ボルヘスについて話をしてきた訳ですが、ボ
ルヘスが他界して20年の年月が経過した今日、今まで
話してきましたように、栄光への道をたどったボルヘス
のことを思い起こします。

本日、イベントに参加して下さった皆様に改めて御礼
を申し上げますと共に、ボルヘス歿後20周年を記念し
て開催されます本日のイベントをとおして、一人ひとり
が人生の迷路で立ち止まる時、進むべき方向を示してく
れる美的感覚の再生を願い、私の挨拶を終わらせていた
だきます。



世界バスケ・アルゼンチンチームの応援

「埼玉アルゼンチンの夕べ」を開催

埼玉・アルゼンチン友好協会



島村会長からアルゼンチンチーム代表へ記念品贈呈

埼玉・アルゼンチン友好協会（島村治作会長）は、日
本アルゼンチン協会（土屋義彦会長）の埼玉地域版とし
て、2005年12月に発足し、アルゼンチン共和国との友
好親善・交流を推進しているところ、去る8月28日に
「アルゼンチンの夕べ」を開催し、130名を超える参加
者で賑わった。

今年は第15回FIBAバスケットボール男子の世界選
手権が、8月26日から9月3日まで、土屋氏（現日本
アルゼンチン協会会長）が埼玉県知事時代にその建設に
心血を注いだ、さいたま新都心のシンボル施設である
「さいたまスーパーアリーナ」で、決勝トーナメントが
開催された。この選手権は、五輪と並ぶ世界の一大イベ

ントで、1955年からほぼ4年おきに開催されており、今
大会が15回目。アルゼンチンは、前回大会で準優勝、ア
テネ五輪では金メダルの強豪チームで今大会では優勝候
補と評されていた。

このような大会を機会に、「アルゼンチンチームに頑
張ってもらい、また、アルゼンチンを埼玉県民にもっと
知ってもらう為、埼玉・アルゼンチン協会イベントを
考えてもらえないか」との提案が、在日アルゼンチン共
和国ボルスキ特命全権大使からあった。

これを受け、当協会正、副会長で検討し、余りコスト
をかけずに、手作りで、心のこもったイベントとなるよ



土屋名誉会長（当協会会長）から選手へ記念品贈呈

う、在日亜国大使館の助言を頂きながら、工夫をこらして準備を進めた。

イベント開催の日取りは、アルゼンチンチームの試合がない8月28日と決め、開催場所は、選手の移動にも、またイベント参加者にも便を考慮して、交通至便なJR大宮駅近くの「大宮サンパレス」とした。

限られた時間の中で、参加して良かったと思えるイベントにしていくため、開催のポイントを次の4点に絞った。

(1) アルゼンチンチームの応援・激励と高校生との交流

監督、マネージャー、選手約20名を招き、応援・激励をするとともに、アルゼンチンとの係わりのある県立坂戸西高校のバスケット部生徒50名が参加して、歓迎セレモニーや選手との交歓を行った。

(2) アルゼンチンと彩の国（埼玉県）の食を通じた相互理解の推進

ポルスキ大使令夫人自らの手ほどきを受け、また、レシピをご提供してもらうなどして、アルゼンチンの家庭料理を作り、振舞うと共に、JA埼玉県中央会などの協力を得て、彩の国の農畜産物の食材

を豊富に品揃えて、すし、てんぷら、煮物などを作り、食を通じた相互の国際交流を行った。

(3) アルゼンチンの物産・観光と彩の国農畜産物のPRと即売

ワインやマテ茶の試飲、観光パンフ、パネル展示、旬の農畜産物の展示・試食と即売を行い、その美味しさをPRした。

(4) アルゼンチンと彩の国の文化交流

それぞれの伝統芸能文化であるアルゼンチンタンゴや和太鼓、日本舞踊の実演を催し、相互の文化交流を行った。

その他、飲料水、飲み物類などは、協賛企業にお願いし、関係の皆様のご支援、ご協力によって、不行き届きながらも、心のこもった「アルゼンチンの夕べ」が開催出来たと思っている。

ただ心残りは、応援したアルゼンチンチームが四位に終わったことだった。

しかし、言葉が通じなくても、誠意は誰にでも通じることをこのイベントで私達は身をもって知った。

この体験をこれからの協会活動に活かしていきたいと思っている。

(さいたま・アルゼンチン友好協会)



アルゼンチンの
～埼玉とアルゼンチンの出合



「決定は遅いが実行は着実ですね」

～滞日5年のビジネスマンが見た日本～

きき手 河崎 勳

「和食？大好き。カイセキが一番好きです。特に秋の会席料理がいい。魚やきのこが美味しいですからね」「日本酒は冷やに限ります。シュンマイシュがよい」??

— (純米酒のことだった)

「日本では、家族と一緒に北海道や長野にスキーに行きました。富士山の山頂まで登り、南は石垣島まで行きました。家内も子ども2人もみんな旅館と温泉が大好きです。」

エネルギッシュでいつもほお笑みを絶やさない43歳の代表取締役社長。アルゼンチン

の鉄鋼メーカー テチント社と旧日本鋼管が合併で作った鉄鋼パイプメーカー「NKK シームレス鋼管」(川崎市)は、世界的な石油・天然ガスの開発競争の波に乗って業績好調である。

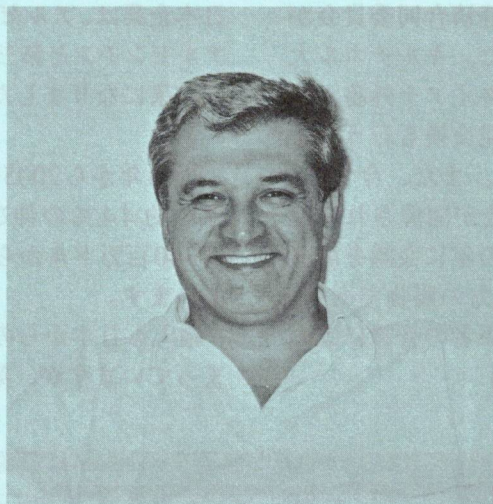
「今は東京でもニューヨークでもシンガポールでも世界の大都市はだんだん同じような都会になってきています。グローバル化が進んでいるのだと思います」

「その中で、日本のビジネス社会は外の者がなかなか入りにくい形になっています。日本のビジネスは、製造・サービス業などものを提供する側とそれを求める顧客側がいろいろな形でしっかり結びついていて密接な関係ができあがっています。その中へ外から入って行くのはたいへんです。韓国がちょっと似ています。中国は全く違いますがね」

—日本は意思決定に時間がかかると思いませんか？

「かかりますねえ。なかなか決まらない。プランニング段階でも、すごく時間がかかります。ネマワシが要りますからね。いろいろなことでやり取りの回数が非常に多いです」根回しにあたるスペイン語の言いまわしをじっと考え込んでいたが、「ありませんね」

「アルゼンチンでもそうですが欧米では、プランニングや決定が速いからいきなり大きなプロジェクトが、どかんと現れることがあります。日本ではそんなことは起こ



マルセル・ラモスさん
5年間日本に滞在、本年11月に帰国した

りえない。しかし一方で、企画と決定が速くてもいざ実行となるとあちこちに問題が出てきてなかなか進まないということがあります。日本では、企画・決定には時間がかかるけれど実行段階に入ると効率よくどンドン着実に進んでいきます」

「それと日本は、クオリティに厳しいです。ものに対してサービスに対しても質の良さということに非常にこだわります。」

—家庭のありかたはどうですか？

「週末の公園の家族連れを見ていると、ああ家族を大事にするのは同じだなと思います。しかしウイークデイは違いますね。夜は男だけで酒を飲んでいる。ああいうことは欧米ではありませんね。いつか酒席で『もう家に帰らなければ』と私が立ち上がったら『ええっ?』とびっくりされたことがあります。一方で奥さんたちは、女性だけで連れ立ってたっぷり時間をかけて優雅に昼食を楽しんでいる。アルゼンチンでは99パーセントありえないことです。」

「若い世代は違いますね。考え方やライフスタイルが欧米に近くなってきているように見えます。グローバリゼーション(世界的同化)ですね。情報の進化も原因の一つでしょう」

—何かアドバイスを？

「日本は少子化をどうするかでしょうね。あっという間にきますよ。一方で外国人(労働者)の受け入れには抵抗がありますしねえ」

「他の国では、海外へ勉強に行った学生が本国には帰らない。日本では海外留学生は帰ってくる。これは将来大きな力になるでしょうね」

(かわさき いさお；当協会理事)

アルゼンチン事情

～6年ぶりの再開、日亜経済合同委員会を終えて～

井尻 収一

本年9月、6年ぶりに第21回日亜経済合同委員会がブエノスアイレス市で開催されました。キルチネル大統領と佐々木委員長との単体会見、タイアナ外務大臣主催昼食会など亜国政府首脳との意見交換も行うことができ、充実した会議となりました。また、今年は、1966年に第一回日亜経済合同委員会が開催されて以来、ちょうど40年目に当たり、節目の年に会議を開催できましたのも皆様のご支援とご協力の賜物であり、在亜日本商工会議所を代表して、関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

さて、ご存知の通り、資源に恵まれない日本と豊かな大地を有するアルゼンチンは相互補完関係にあると言われながら、いまだに両国間の貿易は低迷しています。その原因はどこにあるのでしょうか。その原因に対して日本企業は今後のどのような戦略を持っているのでしょうか。今回の日亜経済合同委員会でもご紹介させていただきましたが、日本企業の活動状況とその要望についてご参考までにご紹介させていただきます。

在亜日本大使館が、当地に進出している日本企業にアンケート調査を行いました。その結果は非常に興味深いものでした。

日本企業が2004年と2005年に行った貿易実績は、2005年のアルゼンチンから日本向け輸出総額は130百万ドルですが、アルゼンチンから日本以外の第三国向け輸出総額は、実にその7倍の900百万ドルにも達しています。

輸入も日本からの輸入が290百万ドルに対し、第三国からの輸入はその2.5倍の720百万ドルとなっております。

日本企業は、アルゼンチンと日本との貿易よりも、寧ろアルゼンチンと第三国との貿易に多く関与しているという結果になりました。

2004年から2005年にかけての輸出の伸びも、日本向けは約44%の伸びでしたが、第三国向け輸出総額は340百万ドルから900百万ドルと、実に164%も伸びています。

輸入も日本からの輸入が2年間で約14%の伸びに止まっていますが、第三国からの輸入総額は340百万

ドルから720百万ドルと、これも111%の伸びを示しています。

このアンケート調査でも明らかのように、日本企業は、単に日本との貿易に従事しているのではなく、アルゼンチン産品を東南アジアや中国など第三国向けに輸出し、そこで出来た製品を日本に持って行ったり、他の中南米やアジアから原材料を輸入し、アル

ゼンチンで製造・加工し、出来た製品を他の中南米や欧米に輸出するといった、非常にグローバルな経済活動をしていることが分かります。そして、アルゼンチンですでに日本企業のグローバル化した経済活動の中で、そのバリューチェーンにすでに組み込まれているのです。

例えば、トヨタはタイ、南ア、ブラジル等から原材料を仕入れ、アルゼンチンで完成車に仕上げ、その完成車はメルコスール域内のみならず中南米全域に輸出しています。トヨタはアルゼンチンの全輸出企業の中で、金額ベースでは15位、製造業では2位、自動車産業では1位の輸出実績を上げており、まさにアルゼンチンの経済発展、外貨獲得、雇用創出に大いに貢献している企業なのです。



会議風景

NECも通信機器やコンピューター等ハードウェアの販売がメインだと思われがちですが、当地ではソフトウェア会社として、サンルイス州に電子政府プロジェクトを納入しました。このプロジェクトには、アルゼンチン若手技術者が開発したデータセンター、通信設備、電子政府関連のアプリケーション・ソフトが含まれており、アルゼンチンの若い頭脳と能力を生かしたビジネス・モデルとして、今後さらなる発展が期待されています。

商社も長年にわたり対日輸出に取り組んできました。しかし、日本とアルゼンチンは、嗜好やスペックが異なり、両国間の貿易拡大は、容易ではありません。例えば、アルゼンチンの牛肉は世界一美味しいと思いますが、口蹄疫の懸念があり、日本には生肉では輸出出来ません。果物も豊富で美味しいですが、地中海ミバエの問題があり、これも処理が必要です。アルゼンチンの小麦はフランス原種ですので、フランスパンやクロワッサンには適していますが、日本人好みのモチモチしたパンの食感はなかなか出せません。大豆は米国産やブラジル産に比べ、蛋白質の含有率が低く、日本のスペックには適合しません。トウモロコシも赤色ゆえ、飼料として配合すると鶏肉が赤くなり、白い鶏肉を好む日本人には嫌われてしまいます。

一方、日本企業が多数進出し、日本との結びつきも深い、東南アジアや中国ではアルゼンチン産品を受け入れやすい土壌があり、特に穀物輸出は旺盛な需要も手伝って、今後も益々増えていく傾向にあります。日本商社は、東南アジアや中国でこれまで築いてきた知見と情報を生かし、アルゼンチン産品の輸出のお手伝いしています。将来はアルゼンチン産の穀物で育った鶏や豚がアジアから日本に輸出され、南米-アジア-日本を結ぶ食糧のバリューチェーンが出来ることが期待されています。

このように、日本企業の当国における経済活動は、残念ながら二国間の貿易統計などには数字として表れませんが、アルゼンチンの経済発展、輸出拡大、雇用増加、技術移転、裾野産業の育成等に少なからず貢献しているのではないか、と思っています。

さらに、日本企業がアルゼンチンをどのように見ているのか、日商日亜経済委員会が実施したアンケート調査によれば、日本企業は、アルゼンチンは食糧を始め、エネルギー・鉱物・水資源に恵まれた資源国であり、インフラや教育水準も高く、チリよりも市場規模



昼食会、(左から、永井駐亜日本大使、亜側マチャード委員長、日本側佐々木委員長、タイアナ外務大臣)

が大きく、今後もメルコスールの主要国として、中長期的に大きな成長が期待できるマーケットと捉えています。

しかし、その一方で、目まぐるしく変更される税制や法制度、過度の労働者保護政策により、アルゼンチンの国際競争力が低下し、将来の事業拡大や人材育成にも悪影響がでているとの回答が、多くの企業からありました。

また、公共料金の凍結、価格統制や再国有化への懸念などにより、民間投資、特に海外からのインフラ等への投資が伸びず、アルゼンチンの将来性、成長性への阻害要因となっているとの指摘もありました。

今や、企業活動は、グローバル化しておりますが、日本とアルゼンチンの間には、まだ二国間租税条約が締結されていないので、両国政府当局には、二国間租税条約の締結に関しても善処をお願いしております。

日本とアルゼンチンはまだまだ遠い国ですが、資源を持たない日本にとって、アルゼンチンの恵まれた大地に、今こそ橋頭堡を築いておくことが重要ではないか、それが10年後、20年後に大きな意味を持つことになるのではないかと考えております。

(本文は、第21回日亜経済合同委員会でのスピーチをもとに纏めたものです。)

(いじり) しゅういち；在亜日本商工会議所会頭
亜国三菱商事会社社長)



タンゴ名曲ものがたり(1)

石川 浩司

ラ・クンパルシータ La cumparsita

「アルゼンチン・タンゴで一番有名な曲は？」と聞かれたら、だれでも「ラ・クンパルシータ」と答えるだろう。名曲の第1条件が「知名度」であるとすれば、この曲が名曲 No.1 であることは疑問の余地がない。だが、この曲を名曲の第1に挙げるにはいくつかの疑問点が無いわけではない。

第1に、この曲はアルゼンチン人の作品ではない。作者はウルグアイ人のヘラルド・エルナン・マトス・ロドリゲス Gerardo Hernán Matos Rodríguez である。第2に、「形式美」が重要な要素であるアルゼンチン・タンゴにあっては奇形児である。通常タンゴは16小節を1主題として2~3主題を繰り返す形をとるが、この曲の第1主題は15小節しかない。第3に、この曲のかなりの部分は原作者以外の筆によるものであり、マトスが作ったのは曲の骨格部分だけなのだ。第4に、この曲が出来てから10年近くは殆ど演奏されることもなく、人々に知られるようになったのはパスクアル・コントゥルシとエンリケ・マロニが「シ・スビエラス」Si supieras (君知るや)という新しい歌詞を作って以来のことで、この時点でこの曲は別の曲に生まれ変わったとも言えるのである。

まず、この曲の誕生と流行の経緯を見てみよう。作曲家マトスはウルグアイ、モンテビデオの大学生だった。タンゴの代表曲がアルゼンチン人の作品ではないという事実はアルゼンチン人にとって面白くない話なのだが、タンゴの神様カルロス・ガルデルだってアルゼンチン生まれではないのだから、これはよしとしなければなるまい。さて、マトスは当時モンテビデオにあった「ヒラルダ」Giralda の経営者の息子だった。彼は格別の音楽知識もない工学部の学生だったが、1917年のカーニバルに仲間たちと以前作った曲を演奏しながら参加したと言われる。この曲の初版の楽譜表紙にこのエピソードを裏付ける絵が描かれている。この年、有名なロベルト・フィルポが父親の経営する「ヒラルダ」に出演したが、この時父親は息子の作品を演奏してくれるように頼んだ。しかし、その作品は未完成と言ってもいい状態だったのでフィルポは彼の旧作「ガウチャ・マヌエラ」の一部を補完して演奏した。だから、この曲はフィルポとの合作と言っても差し支えないのだが、フィルポは作者に名を連ねてはいない。よく演奏されるバンドネオン変奏部分はモレスコという人が作ったが、モレスコも作者には加えられていない。

それから10年近く、この曲は忘れられたままになっていたが1924年にパスクアル・コントゥルシとエンリケ・マロニが新しい歌詞を作って原曲のオブリガート部分に乗せガルデルが歌った。これが大ヒットとなり、当時タンゴが注目されていたヨーロッパでも歌われたので「ラ・クンパルシータ」は全世界に広まったのである。

マトスは自分の旧作が関知しない歌詞を付けられて流行しているのを知って驚愕し、別に「ラ・クンパルサ・・・」で始まる詞を作って対抗した。これは当時の2大レコード会社オデオンとビクターの競争となり、オデオン所属の歌手はコントゥルシとマロニの歌詞を、ビクター所属の歌手はマトスの歌詞で録音した。今日ではどちらの歌詞も余り歌われることはない。どちらも暗い歌で歌い手も聴き手も気が滅入ってしまうからだろう。しかし器楽曲としてはこの曲の人気は高い。それは皮肉なことこの曲の完成度が低く、演奏家がアレンジの段階でいろいろ工夫してより良い形にしようと努力する結果、「ラ・クンパルシータ」は日々進歩している。この曲は「拡張性」に富み「展開力」を秘めているのだ。誕生時には欠点と思われていた部分がこの曲の魅力になっているのである。「ラ・クンパルシータ」は不思議な魅力を持った名曲なのである。

(いしかわ ひろし；当協会理事)



作曲家マトス・ロドリゲス



ラ・クンパルシータが初演された Giralda



ラ・クンパルシータの初版楽譜表紙



Resumen en castellano

por Irene Gashu

Commemoración del Vigésimo Aniversario del Fallecimiento de Borges (p. 1)

por Yoshimasa Nakano

El 16 de noviembre en la Universidad de Waseda, se realizó un evento titulado: “Glorificación del laberinto - Velada de cultura argentina en conmemoración del vigésimo aniversario del fallecimiento de Borges”. La grabadora Michiko Hoshino, Miembro y Consejera de nuestra Asociación, expuso sus obras y participó en el simposio. El Sr. Embajador de Argentina en Japón, Dr. Daniel Polski, saludó a los concurrentes “deseando que esta jornada reavive en nosotros el sentido estético que nos orienta en los laberintos de nuestras vidas”.

“Noche de Saitama-Argentina” (p. 3)

por la Asociación de Amistad Saitama-Argentina

El pasado 28 de agosto, la Asociación de Amistad Saitama-Argentina organizó una “Noche Argentina” para apoyar al equipo argentino de básquetbol, que visitó Saitama para participar en el Campeonato Mundial de FIBA. Más de 130 personas tuvieron la oportunidad de

saborear platos argentinos y japoneses. Se ofrecieron además un espectáculo de tango y otro de “wadaiko” o tambor japonés y bailes tradicionales japoneses.

Lento pero seguro (p. 5)

por Isao Kawasaki

Japón visto por el empresario argentino Marcelo Ramos que ha residido en este país junto con su familia por 5 años. “Aquí se tarda mucho en planear un proyecto pero una vez que se toma la decisión de llevarlo a cabo, se ejecuta con eficiencia”. “En otros países, los estudiantes que se van a estudiar al exterior, no regresan; pero los japoneses sí regresan a Japón. En el futuro serán una gran fuerza”.

Situación Argentina después de la XXI

Reunión Plenaria del Comité Mixto

Empresario Argentino-Japones (p. 6)

por Shuichi Ijiri

En septiembre de este año, se celebró en Buenos Aires, la XXI Reunión Plenaria del Comité Mixto

Empresario Argentino-Japonés. Un dato interesante es que las empresas japonesas en Argentina no se limitan a comerciar con Japón sino que exportan productos argentinos a terceros países y también importan materias primas de Asia para manufacturar en Argentina y exportar los productos terminados a otros países. La actividad económica se ha globalizado. Hace falta un acuerdo bilateral impositivo entre Argentina y Japón.

(Shuichi Ijiri es Presidente de la Cámara Japonesa de Comercio e Industria en la Argentina)

Serie Melodías Memorables Parte 1 (p. 8)

La Cumparsita

por Hiroshi Ishikawa

“La Cumparsita”, la melodía de tango más famosa, fue escrita por el uruguayo Gerardo Matos Rodríguez. Durante 10 años pasó inadvertida hasta que la cantó Carlos Gardel con letra de Pascual Contursi y Enrique Maroni. Irónicamente, su estructura musical rudimentaria, considerada al principio como un defecto se convirtió en uno de sus mayores atractivos ya que permite que cada músico haga sus propios arreglos.

「アルゼンチン日本人移民史」4部作完成

FANA（在亜日系団体連合会）発行の「アルゼンチン日本人移民史—戦後編」の刊行については、本年11月1日発行「協会だより（5）」の中で紹介しましたが、4部作完成に当たり、その概要をここに紹介します。

アルゼンチンへ移住した日本人とその二世たちが長い年月をかけて完成させた移住の記録である。開拓の苦労、こどもの教育の悩み、祖国の敗戦からくる脱力感、戦後日本への食料支援、一世と二世の価値観の相違、日系団体の内部対立など移住者がたどってきた道程を率直かつ詳細に記録している。

アルゼンチン国内の各日本人組織に残されていた記録と各地の移住者からのほう大な聴き取りに基づいている。在亜日系団体連合会が編纂委員会を作り、6年がかかりでまとめ上げた。

国際交流基金、日本万博記念機構、トヨタ財団をふくむ団体からの援助と移住者たちが出し合った資金で作り上げた。

戦前編、戦後編、それぞれのスペイン語版を合わせ4部作になっている。

戦前編内容

- 19世紀末期からの日本人移住先駆者の活躍
- 移住者による日本アルゼンチン貿易の開拓
- 農商務省による海外実業訓練生の送り出し
- 日本人クリーニング店の発展
- 日本人による花の栽培の成功
- 第二次大戦下 移住者を巻き込んだ情報合戦
- アルゼンチンの参戦による日本人移住者の苦難

戦後編内容

- 日本の敗戦による移住者のアルゼンチン定住促進

- 戦後日本への救援活動
- 呼び寄せ移住、花嫁移住
- クリーニング業、花栽培業の発展
- 二世たちの成長と一世・二世間の差異
- 日系団体内部の混乱と団結

「図書新聞」2800号（12月2日発行）が、当協会理事の河崎勳氏の書評を掲載しているので、その書評をここに紹介します。（図書新聞転載承諾済み）

苦闘の歴史の記述

アルゼンチンへの移住者が自分たちの手で残す移住史 河崎 勳

アルゼンチンへの移住者が自分たちで作ったこの書は、苦闘の歴史の記述である。本書の戦前編は2002年にできている。2006年9月に発行されたこの戦後編と、それぞれのスペイン語版を合わせて四部作が完成したこととなる。

統一した移住史を自分たちの手で残す企画は1950年代に生まれた。挫折を経ながらも資料収集作業は続き、最終的に、アルゼンチン国内のほとんどの日系組織が参加する「在亜日系団体連合会」がまとめあげた。

苦闘の移住者を襲ったのは、一面の農作物を全滅させるバッタの大群や電の嵐だけではなかった。第二次大戦での祖国の敗戦は、彼らに「もう帰るところがない」という意識を持たせ、何がしかの蓄えを持って故郷に帰るといふ人生設計を狂わせた。また居住国アルゼンチンのペロン派と軍部の長年にわたる抗争と社会不安、猫の目のように変わる経済政策、不安定な為替相場、頼りがいのない祖国日本の移住行政が彼らの生活を揺さぶり続けてきた。

このような状況の中で彼ら移住者は、戦後の食糧難にあえぐ祖国のためにいち早く救援組織を立ち上げて物資を日本へ送り始める。その行動記録はわれわれを勇気づける。

「子供の通学には学校までの長い泥道を自分でトラクターを運転したり、手綱を握って馬車を走らせたりして送り迎えしました。全部私の仕事です。夫はいつも野菜畑でした。牛の鳴く広い広野で子供を教育するのは言葉に尽くせない苦勞がありました。」

子どもに教育を、そして日本語教育をという移住者の痛烈な願いは全編に満ちている。

そして移住者の二世からは、医者、弁護士、学者、駐日大使、州議会議員らが出ている。しかし全体として見れば、彼らの家族の中には、一世と二世との間に言語の問題からくるコミュニケーションの欠如があり、また「祖国日本」を背負う一世と「祖国アルゼンチン」を持つ二世の間の抜きがたい価値観の相違が鮮明に表れる。これが一世を中心とする「日本人会」と二世の作る「日系人会」との確執になって行く。この移住史は、その過程をも率直に記録している。

政策的意図を持つケースは別として通常の移住は、受け入れ側が労働力あるいは国土開拓を必要としており、一方送り出し側には人口と働き口のアンバランスがある、という二つの条件が揃ったときに成立してきた。日本を出て行った人たちは、日本国内で働いても食べられない状況や「せせこましい人間関係」から離れて“ロマンを秘めた新天地”に望みをかけたと言言している。しかし、“新天地”が生易しいものではなかったこともこの移住史は証明している。“無限の可能性を持つ大地”、“夢のパラダイス”などの無責任な宣伝文句を使って移住を商売の対象にしていた人たちはこの書を読み反省して、自らの非を認めるべきである。

またこの書には直裁な記述はないが、日本の行政が人口増対策から移住奨励を進めるに当たってち密さを欠き、そのつけが移住者にまわったことに読者は思いを致

すであろう。

戦前編と同様にこの戦後編にも大勢の移住者からのほう大な聞き取りの証言が収められている。聞き取りは、先駆者が一九七〇年代に始めたものが営々と引き継がれ、それに今回の編纂委員会のメンバーが手分けをして各地を訪れたり、郵便や電話でやりとりしたりして集めたものが加わっている。移住史全編の記述には恨みがましさや非難の表現はない。事実を正確に詳細に残すことを目標としたことがよく分かる。

アルゼンチンは長い経済不振に悩んでいる。この移住史が最後にふれているように、移住者の二世-三世が、逆に親たちの祖国日本へ出稼ぎに来ており、それがもう二十年にもなっている現状を見るのは辛いことである。

(社団法人日本アルゼンチン協会理事、元NHKアルゼンチン特派員)

▼ アルゼンチン日本人移民氏編纂委員会・
在亜日系団体連合会編

『アルゼンチン日本人移民史 戦後編』

8月刊 A4版582頁 7000円

(ブエノスアイレスで印刷・発行)

『戦後編スペイン語版』(7000円)

『アルゼンチン日本人移民史 戦前編』(6000円)

『戦前編スペイン語版』(6000円)

いずれも送料込

▼ 入手問合せ先

〒252-0804

神奈川県藤沢市湘南台1-21-3-301

文野敏博(ぶんの としひろ)氏

電話 0466-46-7678

FAX:0466-42-0032



第9回 「タンゴ音楽の集い」

映像と名解説でおくる；

「フリアン・プラサ作品集」と「印象に残る歌手11人群像」

平成18年11月15日(水) 鉄鋼会館：石川浩司理事

石川浩司氏(当協会理事)の名解説で進行する貴重な映像によるタンゴ演奏の名場面集は、今回も45名の参加者を時空を越えた「タンゴの世界」の中に引き込み、その映像と演奏に参加者は感動した。

2003年他界したフリアン・プラサ(ブグリエーセ楽団に約10年間在籍)の“ビエホ・アルマセン”でのライブ映像、アニバル・トロイロ楽団の1972年8月コロソ劇場での演奏映像、セステート・タンゴ六重奏団の

1991年来日時の渋谷パルコ劇場での演奏映像など、また、1960年代初頭のフリオ・ソーサ、ウーゴ・デルカ
リルやカルメン・デルモラルの歌映像から、2002年
の歌手スサナ・リナルデイのライブ映像等、大変貴重な
映像が披露され、タンゴの世界に酔いしれたコーヒブ
レークを含めての2時間弱でありました。

リアルタイムのタンゴ演奏ライブとはまた質を異にし
た感動、時間の奥行き、タンゴの奥行きを覚えた時間で
ありました。

当協会会員とその家族、友人の参加に加え、いつも、
現在活躍されているタンゴ歌手/演奏家、かつてオル
ケスタ・ティピカ・東京などで活躍されていた演奏家、
タンゴ愛好家が参加しており、当協会と致しまして、
この“集い”の継続に意を強くしているところであり
ます。

どうぞ来春の次回「タンゴ音楽の集い」をご期待くだ
さい。

平成 18 年度年会費納入の御願い

本年度（平成 18 年 4 月 1 日から平成 19 年 3 月
31 日まで）も、残すところ 4 ヶ月となりました。
9 月末現在で未納になっておりました会員の方には、
11 月 1 日発行の「協会だより（5）」に同封
して振込み用紙をお送りいたしましたところ、
早速ながらご納入戴きました会員の方々には、
ありがとうございました。

まだお支払いを済まされていない方は、早め
にお支払い下さいますようお願い申し上げます。

編集長よりの御礼

フロントページの版画は、今回も引き続き版画大家の
星野美智子さんのご厚意により同女史の作品を使用さ
せていただきました。

執筆・原稿につきましては、在日アルゼンチン共和国
大使館、埼玉・アルゼンチン友好協会並びに在亜日本商
工会議所会頭井尻収一氏のご協力をいただきました。

スペイン語のサマリー（Resumen en castellano）は、
当協会理事のイレーネ賀集さんに作成していただきま
した。

末筆ながら、この場をおかりしまして、皆様のご厚意
に対し厚く御礼もうしあげます。

協会ホームページの 活用お願い



<http://argentina.jp>

アルゼンチンにかかわる興味ある情報やイベ
ント案内を出来るだけタイムリーに会員の皆様
にお伝えするように、上記ホームページ（HP）
の掲示板に載せることにしております。

掲示板には、誰でも自由に入れますので、ど
うぞ気軽にご意見など掲示板にお書き込みいた
だき、協会、会員間の情報交換の場として活用
ください。



本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

日本アルゼンチン協会会報 第 49 号 2006 年 12 月 12 日発行

発行人 木島 輝夫（当協会理事長）
編集長 加藤 勝巳（当協会理事）
編集発行 社団法人 日本アルゼンチン協会
〒105-0004 東京都港区新橋 1-17-1
電話：03-3501-4684
FAX：03-3595-3932
E-mail：argentina@nifty.com
URL：http://www.argentina.jp

印刷 株式会社 アイデア・インスティテュート